

研究成果の紹介

1 組織培養による球根ペゴニア有望系統の増殖

ねらいと成果

球根ペゴニアは豪華な花を付けて観賞価値の高い花きであるが、栄養繁殖では増殖率が低く、種子繁殖では安定した形質のものが得られない。このことが、一般に普及していない原因の一つになっている。現在、兵庫県フラワーセンターが導入あるいは交配育成して保有しているハンギングタイプの系統の中から、組織培養によって容易に増殖することができるものの選抜を進めており、これまでに見つかった有望系統について紹介する。

内容

組織培養実験はB5寒天培地を基本として行い、増殖培地には植物ホルモンとしてNAAとBAPを各1ppm加え、発根培地にはNAAだけを1ppm加えた。増殖のための材料には葉長3～4cmの若い葉を用いた。葉の表面殺菌後、約7mm角の切片にして増殖培地に置床し、2～3か月間培養した。増殖培養で得られたシュートは発根培地に移植した。培養条件は、気温20～25℃、16時間日長とした。

発根培養約1か月後に発根状態を調査した。発根した個体は、試験管から取り出して寒天をきれいに取り除いた後、パーミキュライト等を詰めた7.5cmポリポットに植えつけて順化した。順化後は、培養

土を詰めた9～10.5cmのポットに移植して開花状況等を観察した。

組織培養による増殖率は系統間で大きな差が認められ、比較的増殖率が高かったのは表にあげた4系統であった。なかでも、YW-SA-3は増殖率もその後の発根状況も優れていた。SC-31は、増殖率では優れていたものの、発根がやや劣っていた。鉢上げ後の順化でもYW-SA-3がやや優れていたが他の3系統も大差なく順調な生育であった。鉢上げ後の観察によると、最も早く開花に至ったのはYW-SA-3、次いでPW-PK-2とSC-31、最も遅かったのはWH-PK-25であった。

生育が進むにつれていずれの系統も茎が下垂してきたが、YW-SA-3は茎が太くわずかに下垂程度が弱いように感じられた。WH-PK-25は最も大輪であるものの、分枝が多く管理に手間を要すると思われ、さらに落花が激しく、この系統を普及に移すことは困難と考えられた。

今後の方針

黄色あるいは白色の単色かそれに近い花色の有望系統が見つかっておらず、これからも選抜を行っていく。

山元 義久（中央農技・生物工学研究所）

表 球根ペゴニア有望系統の特性

系統名	増殖率	発根	花色	その他
YW-SA-3	◎	◎	黄色+オレンジ	
PW-PK-2	○	◎	白+ピンク	ピンク単色に近い
SC-31	◎	△	赤単色	
WH-PK-25	△	○	白+ピンク	白単色に近い。落花が多い。

注) ◎,優れる ; ○,普通 ; △,やや劣る